

プロジェクト名：第二次世界大戦前後の機械工業に関する経済史分析

プロジェクト代表者：今泉 飛鳥（経済学部・講師）

## 1 研究の内容

本研究では東京における機械工業の産業集積（おもに中小企業を主体とした工業の地理的集中状態）の形成過程と経済史的意義を解明するため、明治期から高度成長期までの東京所在の機械工業の全国機械市場における役割と、第二次世界大戦がもたらした変化（戦時の都市計画、戦災、及びその後の復興政策と工業立地政策の影響）を明らかにする。

## 2 本研究の意義

代表者はこれまで、関東大震災（1923年）や1920年代の都市計画が東京府に於ける機械工業の産業集積に与えた影響を分析してきた。こうした研究は産業集積の存在が日本の工業発展のなかで果たした役割を考察に繋がる。本研究ではさらに、高度経済成長期までを視野に入れて東京所在工場の取引・分業構造やその全国市場での役割を明らかにする。第二次世界大戦の前後には、工場疎開や戦争被害、復興需要などで東京所在の機械工場は激しい変動を経験したと見込まれる。戦時・戦後の変化の分析を加えることでより長期的な視点で東京機械工業の産業集積史研究を深化させ、現状の理解に繋げることができる。

## 3 平成23年度の作業の焦点

上記の研究を遂行するにあたっては、まず分析の基礎となるデータ構築を行う必要がある。そこで本年度は、第二次世界大戦前後における機械工業の作業内容や立地とその変化を捕捉し得る重要な個票資料である「占領初期実態調査 工鉱業会社報告書」の必要部分収集と整理を主に行うこととした。

具体的には、上記資料中分析に必要な東京所在の企業の調査票を、プロジェクト代表者自ら、及び院生1名への委託の形をもって複写した。また、一部のリールは必要箇所が多いため、リールそのものを購入することとした（6本）。

以上のとおり、上記資料の複写・整理作業を行うとともに、これまでに代表者が画像ファイルにて収集してきた機械工業の企業資料の紙焼き作業及び、関連する諸研究の収集を行った。

## 4 成果及び今後の見通し

以上説明のとおり、本年度の作業の中心は資料収集であったため、論文の公表や研究発表のような形の成果はまだ存在しない。今後ひきつづいて分析を行い、成果をまとめる見通しである。

以上